

ヘレニズム時代におけるサナトロジーの動向 — プラトン外篇『アクシオコス』研究ノート —

近 藤 均

はじめに 死をめぐる現代日本の状況

現代の日本では、「死」をめぐる混沌とした状況が現出している。たとえば、①従来の「三徴候死」（いわゆる「心臓死」）に加えて「脳死」の概念が提起され、死の定義そのものが揺らいでいる。②合法的な「安楽死」の構成要件をめぐることは、東海大医学部付属病院事件を契機として一応の基準が示されたが、依然として多くの医療現場では患者の「死ぬ権利」と「生きる義務」の相克に悩みつづけている。また、「尊厳死」は安楽死と同一とも、似て非なるものとも捉えられ、その概念規定は十人十色である。③その一方で、高度先端医療技術を背景としたいわゆる過剰医療は、「スバゲティー症候群」などと揶揄される状況を生み出し、反省を迫られている。④本格的な高齢社会の到来とも相俟って、死を目前にした患者に対する全人的な「ターミナル・ケア」のあり方も深刻な問題となっている。⑤さらに、現行法体系に目を転ずれば、「死刑」制度存続の是非をめぐる議論が盛んである。⑥老若男女を問わず「自殺」者は後を絶たない。

死についてトータルに思索する「死生学（サナトロジー）」という学問も注目され始めた。その契機となったのはキューブラー・ロスの名著『死ぬ瞬間』であろう。「一人称の死」「二人称の死」「三人称の死」というように、死を人称に分けて考察することも、ジャンケレヴィッチが『死』の中で提起して以来、かなり一般化した。「デス・エデュケーション（死の準備教育）」あるいは「デス・スタディー」と呼ばれる活動も活発になってきている。これらに関連して、「グリーフ・エデュケーション（悲嘆教育）」や「プレ・ウィドフッド・エデュケーション（寡処教育）」といった活動も広まりつつある。死

の淵から生還した後で「臨死体験」を語る人も増えた。各個人の死生観そのものが問われる時代となってきた。

キリスト教、仏教、イスラム教をはじめ、既存の思想や宗教は、死をどう捉えているか、思想・宗教別に死生観を研究することも盛んになった。概説的な書物は選択に迷うほど巷にあふれている。とはいえ、歴史的脈絡を踏まえないまま断片的知識をいくら寄せ集めても、決して深い思索には繋がらない。たとえば、現代のターミナル・ケアの現場としてのホスピスといえば、その淵源は中世キリスト教世界にあり、ビハーラといえば仏教に由来する。それぞれ、歴史的背景を担って存立している施設である。世界史を巨視的に捉え、死をめぐる人間の様々なとらえ方を歴史的脈絡の中に定位して理解することがますます重要になってきている。歴史家フィリップ・アリエスの通史的な大著『死を前にした人間』などとは比べるべくもないが、本稿も、そのささやかな試みである。本稿が目指するのは古代ギリシャ世界のサナトロジーである。むろん、当時、今日的な意味でのサナトロジーが学問として確立されていたわけではないが、「死にかんする言論」という語源的なニュアンスでこの語を用い、敢えて表題として掲げた。

§ 1. サナトロジーの語源と古代ギリシャ思想

西洋思想の伝統を形成してきた中核に、ヘブライズムと並んで位置しているのがヘレニズム（古代ギリシャ思想）である。そもそもサナトロジーという語自体、ギリシャ語で死を意味するタナトス（サナトス）と、言論ないしは理論を意味するロゴスに由来する。にもかかわらず、ギリシャ世界の死生観に

については、サナトロジー関係の書物で取り上げられることはそう多くない。とくに、ギリシャ後期つまりいわゆる「ヘレニズム時代」については、日本では、思想的解明が遅れている。この時代は、アレクサンドロス大王の東征（前334年）または死去（前323年）から、ギリシャ文化圏に包摂されていたエジプトがローマ帝国に併合（前30年）されるまでの時代を指し、地理的にはギリシャ・マケドニアのほかアレクサンドロス東征の全域にわたる。

ヘレニズム時代といえば、ギリシャ古典期（前5～4世紀）と比べ、哲学史上では、存在論・認識論といった学問的探求への意欲が衰えると共に、コスモポリテス（世界市民）としての現実の人生問題が重視され、哲学イコール人生の懊悩に対する慰安、というような様相を呈していた時代であると、よく指摘される。したがって、死をめぐる思索という点で解明が重要なのは、古典期よりもむしろヘレニズム時代であろう。その解明は、現代日本の思想状況に対しても照射するところ多大であろう。なぜならヘレニズム時代は、体系的な思想がひと通り出揃った古典期の後を承けて、それらを自由に参照しながら思索を展開できる時代であったし、その点で、古今東西の様々な思想が情報として巷にあふれる現代日本と、規模こそ違うが、事情はよく似ているからである。

一般にギリシャ思想は明るく健康的だというイメージで捉えられてきたが、ギリシャ人として、健康の対極にある死を決して無視していた訳ではない。既に19世紀の西洋古典学の隆盛は、彼らの死生観にも着目していた。ローデの大著『プシュケ（魂）』は有名である。さらに、20世紀初頭のブッチャー『ギリシャ精神の諸相』や、同世紀中葉のドッツ『ギリシャ人と非理性』といった古典学者の業績も、かなり早くから日本に紹介されている。しかし、そろそろ、現代のサナトロジーの研究動向や成果も踏まえ、古代ギリシャ、とりわけヘレニズム時代の死生観を照射し直す時期にきているといえよう。

しかも、そうした思想は、ソクラテス、プラトン、アリストテレスなどというように、偉大な個人のいとなみとしてではなく、キュレネ学派、キュニコス学派、アカデメイア学派、逍遥（ペリパトス）学派といった学派集団、さらには名もなき庶民たちの集団的なダイナミズムとして捉え、理解すべきであら

う。

じつは、こうした研究を推し進めるための格好の材料がある。この時代に書かれ、死について様々な角度から論じ、プラトンの名を冠して伝えられる対話篇『アクシオコス』である。これは小品ながら後世の歴史に少なからぬ影響を与え、邦訳も既にあるが、少なくとも日本では、本格的に研究の対象とされたことはない。本稿はその研究に先鞭をつけようとするものであるが、紙数の制約上、序説ないしは研究ノートに止めざるを得ない。

ところで、ギリシャ思想の中の「死」を捉えるのに、前述のローデも大著のタイトルとしたプシュケ（*ψυχή* / ローマナイズして示すと *psyche*）の概念を抜きにして扱うことはできない。『アクシオコス』でもこれがキーワードとなっている。この語は、魂・心・精神・自我というようなニュアンスで同篇に頻出する。

煩瑣になるが、まず、本研究に必要な限りにおいて、ギリシャ哲学思想史の流れの概略を確認し、次いで、プシュケの概念との関連で、当時の死生観のアウトラインを整理しておくことにしよう。

§ 2. 古代ギリシャ思想史概観

(1) 神話から自然哲学へ

ギリシャ人も、ホメロスの『イリアス』『オデュッセイア』、ヘシオドスの『労働と暦日』に代表されるように、古くは他の多くの民族と同様に神話や物語によって自然現象や生活の指導原理などを説明づけていた。しかし、紀元前8世紀以降に地中海や黒海の沿岸に建設された多くの植民都市においては、人々は、伝統に束縛されない自由な生活や経済的余裕から生じた閑暇（スコレ）に恵まれ、またエジプト・バビロニア・フェニキアなどの先進文明の刺激を受け、早くから自由で捉われない広い視野をもつようになり、徐々に神話的説明の立場から脱却した。こうして、ギリシャ人の合理的・理性的な思考は、まず、いわゆる自然哲学として現れた。紀元前6世紀ごろ、小アジアの植民都市ミレトスを中心に現れた自然哲学者たちは、自然の根元ないしは支配原理（アルケ）を、神話によってではなく理性によって合理的に説明しようとした。

たとえば、タレス（前624頃～546頃）は万物の根元を「水」と考え、幾何学・天文学・航海術などに

通じ日食を予言した。アナクシメネス（前585頃～528頃）は、万物の根元を「空気」と捉え、その濃厚化・希薄化によって万物の生成を説明した。ヘラクレイトス（生没年未詳）は、万物の根元を「火」と考え、万物は永遠に生成変化するが、その流動のうちには調和と理法があると説いた。宗教的学派を創設したピュタゴラス（前560頃～480頃）は、宇宙の根元は「数」とあり、数学・天文学の進展に寄与した。

これらの一元論者に対し、前5世紀になると多元論者が出現した。エンペドクレス（前493頃～433頃）は、世界は「火」「水」「空気」「土」の4根からなり、「愛」と「憎」によって動かされると説いた。アナクサゴラス（前500頃～428頃）は、自然を不生不滅・無数無限の「スベルマ（種子）」の混合分離の過程とみ、その運動・秩序の始源として「ヌース（理性）」を立てた。こうした多元論は、やがて、その究極の形態として、原子論に到達した。デモクリトス（前460～370頃）は、不変不滅の「アトモス（原子）」が無数に存在すること、またそれが運動する無限で空虚な空間があり、その両者によって万物は生成・変化・消滅するという唯物論的原理をたてた。

§ 3. 古代ギリシャ思想史概観

(2) 自然哲学から人間学へ

彼らは純粋な知的関心から、理性的・合理的な考察、いわゆる観想（テオリアすなわち英語の theory の語源）をおこなった。しかし、前5世紀中葉、アテナイ（アテネ）がギリシャの政治・文化の中心になると、人々の関心は、むしろ人間や社会の問題に集中するようになった。ペルシャ帝国との戦争に勝ちデロス同盟の盟主となって栄えたアテナイでは、市民階級が興隆し民主政治が急速に進展した。それに伴い、伝統的な権威が力を失い、自由な市民は実生活や政治に関し、より合理的な新しい知識・技能を求めるようになった。

このような市民の要望に応じ、とくに弁論術を研究・教授したのがソフィステス（ソフィスト）たちであった。彼らは、自由な市民に最もふさわしい徳（卓越性）は弁論術であるとし、自ら「徳の教師」と称して青年たちを指導した。彼らの活動をきっかけとして、ギリシャ人の理性的思考は、自然の問題

から人間や社会の問題に向かうようになった。弁論術の探究は、彼らが用いていた言語そのものに対する積極的な省察にもつながった。たとえばプロデコス（生没年未詳）は、意義の類似した語を明確に区別し相対化することによって、辞書の研究と学術用語の形成を促したとされている。

また、彼らはギリシャ各地を遍歴して教授活動を展開したので、宗教・道徳・法律・制度など人間や社会の事柄は地方や集団によって異なるものであることを認識していた。したがって彼らの多くは、これらのものに普遍的真理や絶対的権威を認めなかった。ソフィストの代表格であるプロタゴラス（前485頃～410頃）の、「人間は万物の尺度である」という主張には、人間中心の立場とともに、明らかに相対主義・主観主義の立場が示されている。

§ 4. 古代ギリシャ思想史概観

(3) ソクラテスとその弟子たちの生き方

こうしたソフィステスたちの相対主義を批判し、普遍的真理の存在と道徳の客観性を信じて、ポリス（都市国家）における人間の正しい生き方を示そうとしたのがソクラテス（前470～399）であった。彼は自分の思想活動を「魂の配慮」とよんだ。彼によれば、魂（プシュケ）こそ真の自己であり、それが善くないと、どんなに富や権力などに恵まれても、人間として善く生きることはできないし、真の幸福（エウダイモニア）も得られない。そこで、彼は人々に「汝自身を知れ」と呼びかけ、彼らに魂すなわち真の自己の自覚を促すことを生涯の任務とした。当時アテナイでは、ペロポネソス戦争（スパルタなどを相手にギリシャ世界の覇権を争った戦争）の敗北、衆愚政治への墮落、ソフィステスの横行などに伴い、道徳的腐敗が著しかった。ソクラテスは、このアテナイ崩壊の危機を、市民ひとりひとりの道徳的自覚にもとづく道徳秩序の再建によって救済しようとした。しかし、かえって人々に誤解され、青年を毒しポリスの秩序を乱す者として告発され、死刑判決を受けた。

ソクラテスの人柄と実践に傾倒した弟子たちが創設した学派のうち、活躍が比較的よく知られているのが、アンティステネス（前445～365頃）を祖とするキュニコス学派（キュニコスが「犬のような」の意であるところから、犬儒学派と訳される）と、北

アフリカのキュレネの人アリストテッポス（前435頃～355頃）を祖とするキュレネ学派である。キュニコス学派は、幸福とは外的な条件に左右されない有徳な生活であるとし、無所有と精神の独立を目指した。そのため、シノベのディオゲネス（前404頃～323頃）のように、半文化的な物乞い生活を送る者も出現した。ちなみに、このキュニコスこそ、社会風習や道德理念などを冷笑・無視する生活態度を意味するシニシズムの語源である。キュレネ学派は、感覚論に基づいた快楽主義を説き、過去の幻影や未来への希望に惑わされない認識をめざした。ヘゲシアス（前3世紀）らがこの学派に属する。

しかし、何といてもソクラテスの問題意識を最も体系的に発展させた弟子は、プラトン（前427～347）であった。

§ 5. 古代ギリシャ思想史概観

(4) プラトンからアリストテレスへ

プラトンは、感覚や経験によって捉えられる世界と理性によって捉えられる世界を峻別し、前者が絶えず生滅変化する現実の世界であるのに対し、後者こそ永遠不変の真理の世界、理想の世界であるとし、それをイデアの世界と呼んだ。このイデア界の認識を彼は、魂の想起として説明した。すなわち、人間の魂はかつてイデアの世界に住んでいたもので、肉体に宿って現実の世界に住むようになって、故郷であるイデアの世界に抑え難い郷愁・愛慕を感じ、それに駆り立てられて、イデアの世界に帰り、真の自己を知ろうとする、というのである。

彼の弟子アリストテレス（前384～322）は、師の思想を批判的に継承しつつ独自の思想体系を構築した。彼の考え方は、師に比べるとはるかに経験的であり現実的であった。彼は、イデアをプラトンのように個々の具体的・経験的事物のかなたにある超越的存在とは考えず、個々の事物に内在してそれらを完成に向かわせる形成力であるとし、プラトンにみられる理想と現実の二元論的対立を克服しようとした。こうして彼は、現実のあらゆる領域にわたって冷静に分析・記述しつつ、自然と人間に通ずる包括的な思想体系を構成し、それまでのギリシャ思想を集大成するとともに、論理学や生物学をはじめ、様々な学問の基礎を確立した。

彼の思想や学問の底流をなすものは、プラトンに

みられるような理想をめざす情熱的・実践的関心ではなく、真理の静かな観想であったといつてよい。これは、当時ギリシャのポリスがマケドニアによって政治的独立を失い、それに伴ってギリシャの学芸もポリスの基盤を離れて個人主義的な色彩をもってきたことの反映でもあったと捉えることができる。

§ 6. 古代ギリシャ思想史概観

(5) 古典期からヘレニズム時代へ

この傾向は、ヘレニズム時代に入り、さらにローマ帝国という世界国家が実現するに及んで、いっそう助長された。ポリスの崩壊によって生活や思想の基盤を失った人々の間には、世界市民（コスモポリテス）という自覚が生まれ、ポリスや民族に束縛されずに個人の完成や幸福を追求しようとする考え方が現れてきた。このような考え方を代表するのが、エピクロス（前341～271）の快楽主義やストア学派の禁欲主義（あるいは厳粛主義）の思想であった。

エピクロスは、デモクリトスの原子論を継承して、それに基づく実践的哲学論や快楽説を提唱し、人生の目的は魂の平安（アタラクシア）を求めることにあるとした。彼の哲学論を奉じる学派、いわゆるエピクロス学派から、ローマ時代にルクレティウス（前94頃～前55頃）が輩出した。

ストア学派は、キプロスのゼノン（前335～263）が始めた哲学の一派で、その名は、彼が講堂として使用した、壁画のある柱廊（ストア・ポイキレ）に由来する。学問を論理学・自然学・倫理学に三分し、倫理学を重視して厳格な禁欲主義を説き、政治思想としては世界市民主義・自然法思想を唱えた。このストア学派の哲学者で、前1世紀に、地理学・歴史学・天文学・自然学などにも通じ、それらを折衷的に統合して一元論的体系をつくりあげたのがポセイドニオス（前135～51）である。その体系のキーワードであったのは、森羅万象を貫いて遍在する神的な pneuma（氣息）であった。ちなみに彼は、新プラトン主義（後3世紀のプロティノスとその流れをくむ思潮）の先駆と目されている。

次に、以上の各時期を貫いて流れる、死の思想についてまとめておこう。

§ 7. 多彩なプシュケ観と死生観（1）

よく指摘されることであるが、ギリシャ人による人間考察の第一歩は、人間を「不死なる」神との対照において捉えることにあった。そもそも、既にホメロスの叙事詩に、「死すべき」を意味する形容詞「トゥネトイ」および「プロトイ」が、そのまま名詞として「人々」を意味するという語法が散見される。他方、神々のほうは、死すべき人間たちとは異なり、不死であるというわけで、それらの否定語「アタナトイ」および「アンプロトイ」でしばしば表されている。冒頭のア（α）またはアン（αμ）が否定を表す接頭辞である。こうしたホメロスの語法が、「人間とは死すべきものである」という一種の定義をギリシャ人の間に確立した。その定義のヴァリエーションには事欠かない。たとえば叙情詩人ピンダロス（前520頃～440頃）は、「人間とは何であり何でないのか、人間、そは影の夢」と謳った。アリストテレスは、「人間は知識を受け入れ得る死すべき生きものである」と定義している。

なるほど人間は死すべきものである。だが「死」とは何か。こう問われても、誰にとっても文字どおり未来のことに属する死については、確実な「知識（エピステメ）」は誰ももち得ず、ただ「憶測（ドクサ）」を語り得るにすぎない。あるいは、悲観的に楽観的に「予想（エルピス）」を示し得るのみである。ギリシャ人は自己の死および死後のすがたにかんして、じつに多彩に予想し憶測してきた。その種のファンタジーが多数知られている。魄霊（亡霊）と化した母親やかつての僚友たちに、自らは生きながら再会するという、『オデュッセイア』の主人公オデュッセウスの冥界訪問譚は、あまりにも有名であるが、ここで魄霊（亡霊）を表しているギリシャ語がプシュケである。

プシュケはもともと「息をはく」という動詞に由来する語で、ホメロスの叙事詩では、死者の口や傷口から氣息のように抜け出たプシュケは、生前の姿そのままの亡霊となって冥界に下るとされていた。前述の哲学者アナクシメネスにあっては、「私たちのプシュケは空気であって、これが私たちを活かし保っているように、世界全体を氣息（プネウマ）すなわち空気が、取り巻いている」。すなわち彼にあっては、プシュケは人間が呼吸する空気そのものだったのである。

ところが、やがて古典期になって、主としてソクラテス以降、プシュケは、肉体と対立する神的存在としての魂と捉えられるようになった。心や精神や自我とほぼ同じニュアンスの語となったのである。こうした事情が、心や精神や自我と関係する近代西欧語、たとえば英語の psychology（心理学）、psychiatry（精神医学）などの語に反映されているわけである。しかもこのプシュケは、死後もそのまま存続するものとされた。

こうした転機をもたらしたのは、紀元前7世紀頃、ディオニュソス崇拝から成立した宗教オルフェウス教である。この宗教では、宇宙の起源や神々の系譜が説かれるとともに、肉体と対立する神的存在、すなわち魂としてプシュケを捉え、靈魂不滅信仰を中心に密儀が行われ、禁欲的苦行が実践された。これが後に、前述のピュタゴラスの教団やプラトンに大きな影響を与えた。前述のようにプラトンにあっては、この神祕・遊離的なプシュケがイデアの世界と関連づけて論じられているわけである。

密儀といえば、オルフェウス教とは直接の関係はないが、アテナイ西方の都市エレウシスでは、古くから、農業神デメテルとペルセフォネの母娘をまつる秘儀が行われた。その秘儀に参加すると、再生と来世における幸福とが保証されるとされ、ギリシャ各地から多くの人々が参集した。この密儀はローマ時代まで存続した。

§ 8. 多彩なプシュケ観と死生観（2）

一方、前述の原子論的唯物論者たちも、実体としての魂の存在を認め、それをプシュケの語で表したが、彼らにあっては、肉体のみならず魂も原子から成っていた。彼らにとっては、死とは、生物が、肉体であれ魂であれ、つまりは身体であれ精神であれ、全て原子的要素へと分解してしまうことにほかならないのであり、したがって、死後にはいかなる感覚もあり得るはずがない。エピクロスの『メノイケウス宛書簡』にあるように、「死は私たちにとって何ものでもない、と考えることに慣れるべきである。なにしろ、いっさいの善悪は感覚に依存しているが、死とはまさにその感覚を奪われることなのだから」。これは、前述のどの思想とも異質な死生観である。

エピクロスを師と仰いだローマ時代の哲学者ルクレティウスが著した哲学詩では、死後の状態に思い

をはせて自分の肉体が腐敗したり焼かれたり獣に食われたりすることを嘆く者を、次のように批判している。「思うにその者は、自らの発言を十分には自覚しておらず、また生命からことごとく自分を引き離しているのではなく、自分の一部が生き残ると、それと気づかず思い描いている。(中略) 屍体と自分自身とを十分に引き離して考えることなく、屍体を自分だと思い、その傍らに立って自分の感覚を付け加えるのだから。それゆえに、死すべき者と生まれついたことを嘆き、真の死においては他の別な自分などというものが存在しようはずのないことが判らず、別の自分が生き残って自分が死に果てたのを悲しみ、傍らに立って、横たわっている自分が噛み裂かれたり焼かれたりすることを痛く感じるができるのだと思い込んでいるのだ」。

そしてしばらく後にこう述べている。「同様にまた、私たちが生まれる前の永劫の時代の古い幾年代が、いかに私たちとは無関係なものであるかを悟りたまえ。つまりこれこそ、私たちの死後に来るべき時間を映す鏡として自然が私たちのために差し出してくれるものののだ。 いったいそこに何か恐ろしいものが映っているのか。何の悲しいものが見られよう。いかなる眠りよりも安らかなものがあるのではないのか」。

§ 9. 死をめぐるソクラテスの問題提起

死をめぐるこうした様々な予想ないしは憶説は、やはり真理(アレテイア)の的を射止めてはいないのかも知れない。哲学者ヘラクレイトスの言葉にあるように、「死後に人間を待っているのは、人間が予想もせず思いもかけぬようなもの」なのかも知れない。だが、それにもかかわらず、彼の言うように、「予想しなければ予想外のものは見出せないであろう。それはそのままでは見出し難く捉え難いものなのだから」。とにかく、死にたいしては、人間は憶説に身をゆだね、身を賭けるしか方途はない。だからこそ、古今東西、死をめぐるではいろいろな思想が百花繚乱のありさまなのであり、古代ギリシャも例外ではなかったのである。

ところで、魂の配慮を生涯の使命とした前述のソクラテスは、弟子のプラトンによれば、ほかならぬ死刑を宣告されたときにはもう既に、自らの死後に対して「楽観的な見通し(エウエルピス)」を抱い

ていた。死後は次の2つのうちのいずれかでしかない。すなわち、全くの無のような「何の感覚もない状態(メデミア・アイステシス)」で、いわば夢ひとつ見ないような眠りのようなものか、あるいは、伝説にあるように、魂(プシュケ)が現世から来世へと「転居(メトイケシス)」した状態かである。そして、いずれであるにせよ、死は歓迎に値する。なぜなら、前者であれば、昼夜を問わず安らぎのない現状から脱して熟睡を迎えられるわけであるし、後者であれば、来世では現世と違って神々たちによる正しい裁判が行われているであろうし、既にそこに来ている賢者たちと対話を楽しむ機会にも恵まれようから。いうまでもなく、この前者のような状態は、前述の原子論的唯物論者たちの死生観に通じるものがある。

ソクラテスがこのようなオプティミストでいられたのは、「善き人には生前にも死後にも悪しきことは何ひとつ起こらない」という不動の信念があったからである。故意に不正を加えるようなことは誰に対してもしてこなかった、と確信している彼にとっては、いずれにせよ後顧の憂いなく死を迎えられたのである。

だが、「知恵と正義において他に比類をみない」と弟子によって評されたこのソクラテスのような人物ならいざ知らず、顧みて自分の過去に幾多の不正を見出すような多くの凡人は、死期が迫ると、「暗い不安(カケ・エルピス)」につきまとわれつつ暮らさざるを得ない。そしてそのような苦悩の状況にあっては、人は何らかの精神的慰安を必要とする。その慰安は、それが「哲学(フィロソフィア)」すなわち「知恵(ソフィア)の愛求(フィリア)」、あるいは「信仰(エウセベイア)」という、人間精神の最も高邁なとなみのうちに志向されるとき、単なる一時しのぎの「気休め」(そのニュアンスを敢えてドイツ語で示すならば *der Behelf*) とは違って、苦悩からの真の「救い」(ドイツ語では *die Befreiung*) となろう。

§ 10. プラトン外篇『アクシオコス』概観

では、哲学にも信仰にも無縁で、いわば自力救済を期すことのできない者は、死に臨んで、いったいどのようにして慰安を見出したらよいのか。そのような者は、たとえば、哲学(愛知)者のほまれ高い

ソクラテスのような人物との真摯な対話のうちに、それを求めたらよいかもしれない。じつは、死に瀕して苦悩している者をほかならぬそのソクラテスが精神的にケアするという設定で書かれた文献が、現に存在しているのである。これこそ、ほかでもなく、前述した、プラトンの名を冠して伝えられている小対話篇『アクシオコス』であり、その表題は、この小品でケアされるよう設定されている瀕死の病人の名からとられている。写本によっては、「死について」という副題が付され、これが本篇のテーマを示唆している。ステファヌス版（1578年に刊行されたプラトン全集で、プラトンからの引用はこの版の頁で示すのが慣例）でわずか8頁余り、単語数にして2370余りという超短篇であるにもかかわらず、その慰めの対話のうちには、世界観や人生観や宗教思想などがじつに多彩に展開され、全体として眼をみはるべき死生観が示されている。

ところで、伝記作家ディオゲネス・ラエルティオス（後3世紀頃）によれば、『アクシオコス』にかんしては、これはプラトンの真作ではないという指摘が既に西暦紀元1世紀の段階でなされていたようである。すなわち、トラシュロス（1世紀）がプラトンの著作集を編纂した当時、本篇は偽作であるとするのが定説であったという。トラシュロスが著作集に収めた作品群を「正篇」と呼ぶなら、それから外された作品として「外篇」と呼ばれよう。しかし、今日の私たちには、この証言をまつまでもなく、この作品の語彙や文体の特徴をつぶさに検討すれば、本篇の成立が、プラトンの時代より遥かに遅い、紀元前1世紀頃、すなわち、ヘレニズム時代後期あるいは末期であることに疑問を抱く余地はない。また、作者にかんしては、敢えて真偽が問題にされたほどプラトンの真作と密着して伝えられていたという点から推して、その人物がプラトンの学統をひくアカデメイア学派の一員だったことは疑問の余地はない。

本篇はソクラテスとアクシオコスとの対話篇である。冒頭には、対話に至るまでの経緯が設定されている。すなわち、ある日ソクラテスは、クレイニ阿斯なる人物から、父親アクシオコスが臨終を目前にして悲嘆にくれているので「慰める（パレゴレイン）」よう頼まれる。ソクラテスはそれを快く引き受けアクシオコスの許へ急ぐ。その病人は「慰め（パラミュティア）」なしでは全くどうにもならぬ状況である。

ソクラテスは彼の精神的な弱さを非難し、生への執着を捨てよと諭す。以上のような状況設定につづき、慰めの対話が展開される。

§ 11. 「慰めの文学」の系譜

本篇成立の背景を考えると、これをローマ帝国というラテン語世界で盛んになる「慰め（ラテン語で *consolatio*）の文学」の先駆的ギリシャ資料として捉えるという視点は極めて当を得ている。内容からはもちろんのこと、前述のように、慰めを意味する典型的な動詞と名詞が本篇冒頭部に使用されていることから首肯できよう。「慰め」と名の付く作品は西暦紀元前後頃から盛んに現れ、ギリシャ語で書かれたものとしては、プセウド・ブルタルコス（つまり偽ブルタルコス／生没年不詳）による『アポロニオスに与える慰めの書（パラミュテティコス・ブロス・アポロニオン）』が代表的なものである。これは、悲嘆への慰めにまつわる多彩なエピソードを集成した作品である。

さて、『アクシオコス』のように死の問題を扱った作品で、しかもラテン語のものとしては、皇帝ネロの妃に宛てて愛児を喪った母親の悲嘆を慰めた作者不詳の『リウィアに与える慰めの書（コンソラティオ・アドゥ・リウィウム）』、ローマの一女性に宛てて同じく息子の死による心の痛手を慰めたセネカ（前4頃～後65）の『マルキアに与える慰めの書（コンソラティオ・アドゥ・マルキアム）』、さらに、クラウディウス帝の寵臣に宛てて愛弟を失った悲しみを慰めた同じセネカの『ポリュビウスに与える慰めの書（コンソラティオ・アドゥ・ポリュビウム）』などがある。

この種の作品の系譜を溯って行くと、キケロ（前106～前43）の『トゥスクルム論叢』に行き当たる。これはタイトルこそコンソラティオとはなっていないが、内容的には、とりわけその第1巻は、愛娘と死別した悲嘆に対する彼自らの慰めの書でもある。そしてルネサンス期には、ほかならぬ『アクシオコス』が、この『トゥスクルム論叢』第1巻をはじめとする「慰めの文学」全般の、いわば梗概書と見なされていたという。『トゥスクルム論叢』第1巻には、初期アカデメイア学徒クラントル（前335頃～275頃）のギリシャ語著作『悲嘆について（ペリ・ペントゥス）』からのラテン語訳引用文が見出され

るが、その作品も、偽プルタルコスの前掲書によれば、息子たちの死を嘆き悲しんでいるヒッポクレスなる人物に向けての、やはり慰めの書であったらしい。古典学者スイエは、いわゆる「慰めの文学」の草分けとしてこの『悲嘆について』を挙げ、『アクシオコス』にはこの書を模倣したと思われる個所が存在すると指摘している。また彼は、死の問題に坎する慰めの系譜をさらに溯り、アテナイにおける戦没者追悼演説（エピタビオス・ロゴス）との関連までも指摘している。その追悼演説の代表例が、歴史家トゥキュディデス（前460～400）の伝える政治家ペリクレス（前495頃～429）の演説、および、プラトンの『メネクセノス』に収録されている演説である。

§ 12. 「一人称の死」の思索テキストとしての『アクシオコス』

だが、『アクシオコス』と、この種の追悼演説や前記キケロ、セネカなどの著作とを同一線上に置こうとした見解には、『アクシオコス』理解に当たってまた重大な盲点も潜んでいる。なぜなら、それらの作品のいずれにおいても、慰められるのは、近親者を喪った遺族であるが、本篇では、同じく慰めとはいっても、慰められるのはほかでもなく死に瀕している者自身だからである。

すなわち、追悼演説は戦没者の武勲を讃えると共に遺族を慰めるためのものであり、前記クラントル、キケロ、セネカなどの著作はいずれも、おのおの、息子や娘や弟といった近親者を死によって喪った人物に向けての慰めを主題としている。これに対して、『アクシオコス』では苦悩し慰めを必要とする主人公は、ほかでもなく死に瀕している者自身であり、それゆえ、彼の心境は、遺族や近親者たちのそれとは次元が根本的に異なっているのである。

要するに、前記諸著作における慰めがいずれも、愛しき者の死に起因する悲嘆から立ち直らせることを目的としているのに対し、『アクシオコス』中の慰めは、ショリーの表現を借りれば、苦悩の主を生への執着を捨てさせて「従容として死を受け入れさせる (to reconcile to death)」ことが主眼なのである。前記諸著作はいずれも「二人称の死」に対する慰めを主眼としているのに対し、『アクシオコス』では「一人称の死」が慰められているわけであり、読者

は、いつかはおとずれる自分自身の死について思索するよう誘われる。この点で異色の作品であり、独自の意義をもつものといえる。

§ 13. 『アクシオコス』の後代への影響

(1) ギリシャ語・ラテン語圏

本篇が後世に及ぼした影響の歴史をみておこう。前述のように、ディオゲネス・ラエルティオスによれば、プラトンの名を冠して伝えられている本篇は、既に西暦紀元1世紀の段階で一般に、プラトンの真作ではなく偽作と見なされていた。このことは当時の批評家たちの炯眼ぶりを物語っている。しかし、ヘレニズム文化に対しても該博な知識をもっていたキリスト教神学者であるアレクサンドレイアのクレメンス（後150頃～211）や、アンソロジー編集者ストバイオス（5世紀頃）には、引用に当たって本篇を偽作とみた形跡はみられない。その意味では彼らの洞察力は1世紀の批評家たちより劣る。とはいえ、ストバイオスが本篇をその約半分にもわたって自分の編纂した『詩華集』に収録しているという事実は、彼が本篇を高く評価していたという証拠である。

古典学者プリンクマンは、古代末期及びビザンチン帝国の隆盛期に本篇が好評を博していたことを証明する数々の事例を紹介している。彼は、その時代に本篇を引用したり好意的な批評の対象にしたりした人物として、前記クレメンスやストバイオスのほかに、テオビュラクトス・シモカッテス（6～7世紀）、メトディオス（9世紀）、テオドロス・プロドロモス（12世紀）、ニケボロス・バシラケス（同）、トマス・マギステル（13～14世紀）、ニケボロス・グレゴラス（同）を挙げている。さらに彼は、ビザンチン帝国で書かれた文学の一例として、ピリッポスという哲学者（生没年不詳）の断片を挙げ、『アクシオコス』冒頭部とのプロット上および表現上の著しい類似を指摘している。

本篇は、近世以降、西欧世界へも大きな影響を及ぼしたようである。イタリア・ルネサンス期にプラトンの全著作をラテン語訳によって初めて西欧世界に紹介したのが、マルシリオ・フィチーノ（1433～1499）である。むろん、この全集には『アクシオコス』も含まれていた。フィチーノは、ディオゲネス・ラエルティオスがアカデメイア第3代学頭クセノクラテス（前396～314頃）の著作として挙げている『死

について（ペリ・タナトゥ）』と、本篇『アクシオコス』とは、同一の作品であるとの説を唱えた。これは本篇の副題から推しての説であろうが、しかしクセノクラテスは紀元前4世紀の人物なので、前述した本篇の言語学的特徴にてらして、この説は今日では全く問題にならない。

さて、前にもふれたように、イタリアに始まるルネサンスの時代には、本篇は、キケロの『トゥスクルム論叢』をはじめとするいわゆる「慰めの文学」の、いわば梗概書として、持て囃されていたらしい。ちなみにキケロといえば、16世紀前半のフランスのキケロ研究家で、有名な出版業者でもあったドレ（Étienne Dolet; 1509~46）は、『アクシオコス』を仏訳したことでも知られる。

§ 14. 『アクシオコス』の後代への影響

(2) 近代語圏

それにやや遅れて同じフランスのモンテーニュ（1533~92）は、『随想録』の中の「書物について」という章で本篇に言及し、彼特有の皮肉まじりの調子で次のような否定的評価を述べている。「私はプラトンの『アクシオコス』を、あれほどの著者のものとしてはいかにも力のない作品だと思って飽き足りない感じをもつが、それでもそういう私の判断に自信があるわけではない。他の有名な人々の権威ある判断に反対するほど私は愚かではない。それら古人の判断を私の判断は師と仰いでおり、彼らの判断と同じなら、間違っているとしても満足だと思っているほどである」。極めて抽象的な表現なので彼の真意は必ずしも明確ではないが、とにかくモンテーニュは、本篇からはあまり感銘を受けなかったとみえる。しかし、彼がこういう批評をした背景には、本篇を高く評価するという「有名な人々の権威ある判断」が確立されていた事実があったわけである。なお、彼は本篇をプラトンの正篇ではないとみなしてはいないようであるが、当時は一般にそう考えられていたのであろう。

モンテーニュが『随想録』を著していた時期は、ちょうど、イギリスの文豪シェイクスピア（1564~1616）の青春時代にあたる。古典学者ショリーは、その頃フランスのパリにはフィチーノによる『アクシオコス』のラテン語訳単行本が出回っていたことに注目し、シェイクスピアの戯曲『尺には尺を

（Measure for measure）』のモチーフの一部は本篇が源泉かもしれないと推測している。彼が類似を指摘しているのは、その戯曲中の主人公クロードイオが死刑を宣告されたあと、ある公爵が主人公に対して、生に執着せず早く死ぬ覚悟を決めてしまうよう促す場面である。この説教をきいた主人公は、やがて公爵に、「もう死ぬ覚悟はできました（let death come on）」と告白するのである。ショリーはまた、同じシェイクスピアの『お気に召すまま』や『リチャード3世』にも本篇と共通するモチーフを見出し、さらに、共通のモチーフをもつ作品を著したと思われる他の作家として、イギリス・ロマン派の詩人ワーズワース（1770~1850）およびバイロン（1788~1824）、ドイツ古典主義の劇作家シラー（1759~1805）、アメリカの解剖生理学者で詩人でもあったホームズ（1809~94）、イギリスの小説家ステューブンソン（1850~94）といった、錚々たるメンバーを挙げている。これらについて個々に検討している余裕はないが、直接的にか間接的にか、影響を受けていることは疑いないところであろう。

こうして辿ってくと、本篇を高く評価する読者の伝統が、古代ギリシャ・ローマ世界、ビザンチン世界、近世以降の西欧世界と、連綿として続いていることがわかる。プラトンの正篇ではないからといって二級の作品であると簡単に片付けてしまうことだけは厳に慎まねばなるまい。むしろ、これは、死にかんするヘレニズム時代の思想動向、とりわけ「一人称の死」に対する考え方を探るのに最適な重要資料のひとつなのである。

まとめと展望 『アクシオコス』の構成

最後に、『アクシオコス』の構成に言及し、今後の研究に備えよう。『アクシオコス』における、ソクラテスによるアクシオコスに対する慰めの対話は、その全体を13の章に分けるのが適当であり、それぞれを要約すると以下ようになる。

- ①アクシオコスは、死後の自分の姿に思いをはせつつ、死の「恐怖（デオス）」を訴える。しかしソクラテスは、その恐怖は根拠のない恐怖であると指摘する（365 c1~ e1）。
- ②次いでソクラテスは、「肉体（ソマ）」と「魂（プシュケ）」との本質的な差異を論じることにより、死とは、じつは「悪しきこと（カコン）」

から「善きこと（アガトン）」への移行なのだと説く（365 e 2～366 b 2）。

- ③アクシオコスは、そう考えるのならなぜ君は自殺を志願しないのか、と反問する。ソクラテスは、ソフィストのプロディコスから人生の厭わしさを説かれて以来、じつは自分としても死にたいとは思っているのだ、と告白する（366 b 3～c 9）。
- ④ソクラテスは、そのプロディコスの厭世思想をアクシオコスに語る。最初は、人生のいかなる時期も苦しみは無縁ではないと説くもので、嬰兒から老人にいたるまでの各時期に対応した、人生の苦しみが順に説かれる（366 c 10～367 b 8）。
- ⑤次いで、人間界のこのような悲惨な状況に対して神々がどう配慮しているか、詩人たちはどのように嘆いてきたかといった話が、軽いエピソードとして語られる（367 b 8～368 a 7）。
- ⑥次に、プロディコスの厭世思想の第2の局面として、人間の様々な生業ないしは技芸にまつわる人生の厭わしさが、実例に即して語られる（368 a 8～d 4）。
- ⑦そして、国政に従事することの厭わしさを示したところから、話題はプロディコスの思想を離れ、ソクラテスとアクシオコスの忌まわしい政治体験の対話へと移行する（368 d 4～369 b 5）。
- ⑧話題はさらに転換し、ソクラテスは、プロディコスからも聞いたという、「死は生きている者にも死んだ者にも関係がない」、という思想を踏まえて、「どっちみち死は君に無関係だ」と説く（369 b 5～c 8）。
- ⑨しかしアクシオコスはそれを詭弁とみて斥け、重ねて死の恐怖を表明する。それに対してソクラテスは、その恐怖は根拠のない恐怖であることを再び指摘する（369 d 1～370 a 10）。
- ⑩次いでソクラテスは、そもそも魂が大規模な文化的事業に憧れるという事実そのものが、既に魂の不死を証明している、との論理を展開する（370 b 1～c 6）。
- ⑪ソクラテスは結論として、「君が行くのは死ではなく不死へなのだ」と説き、その不死の境涯がどんなものかを述べる。アクシオコスはそれに納得し、もはや恐怖は消えて、むしろ死への「憧れ（ポトス）」を抱いてさえいる

と告白する（370 c 6～e 4）。

- ⑫さらにソクラテスは、ゴプリュエスという名のゾロアスター教の僧から聞いた物語だとして、死後の世界の姿を神秘的に描き出す（371 a～372 a 4）。
- ⑬ソクラテスは、その物語がもつ意味を魂の不死論に即して解釈する。アクシオコスは、死の恐怖が除かれて、もはや死への「恋い焦がれ（エロス）」を感じているほどだと重ねて表明し、ここに対話は終了する（372 a 5～a 19）。

こうしたプロットの中に、前述のソクラテスやプラトンをはじめ、キュニコス学派、エピクロス学派、ストア学派、さらにはエレウシス密儀など、様々な思想・宗教が混然一体となり融合している。そこに、古典期とは異なるヘレニズム時代のサナトロジーの顕著な特色を見出せるが、具体的内容は続稿（掲載誌未定）で検討したい。

（未完）

注

- 1) 本稿では、研究途上のノートという性質上、注は必要最小限にとどめた。ギリシャ語およびラテン語の単語の引用は片仮名に音写して行ったが、音写にあたっては、母音の長短は無視し、ギリシャ文字の κ と χ 、 τ と θ を、それぞれ区別しなかった（ π と ϕ は プ と フ で区別した）。また、ギリシャ語およびラテン語の著作から邦訳して引用する場合、訳書が既に存在するものについてはそれらを適宜参考にしたが、必ず原文と照合し、筆者の判断で適宜、表現を改めた。
- 2) 主要参考文献（順不同）は下記のとおりである。
 - *J. Souilhé: *Platon, Œuvres complètes*, XIII, 3^e partie, Dialogues apocryphes. Paris, 1930.
 - *J. Burnet: *Platonis Opera*, V, Oxford, 1905.
 - *H. Müller und K. Steinhardt: *Platonis Sämtliche Werke*, VIII, Leipzig, 1866.
 - *R. D. Hicks: *Diogenes Laertius*, 2vol., London, 1925 (Loeb).
 - *H. Diels und W. Kranz: *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 6Bde., 4Aufl., Berlin, 1951.
 - *C. Wachsmuth et O. Hense: *Ioannis Stobaei Anthologium*, 5vol., Weidmann, Nachdr. 1974.
 - *P. Shorey: *What Plato said*, Chicago, 1933.

- * A. Brinkmann: Beiträge zur Kritik und Erklärung des Dialogs Axiochos. *Rheinisches Museum*. LI.
- * R. Kassel: Untersuchungen zur Griechischen und Römischen Konsolationsliteratur, München, 1958.
- * H.G. Liddell and R. Scott: *A Greek-English Lexicon*, 9th. ed., with a supp., Oxford, 1968.
- * 久野昭『死と再生 — 神秘主義の原型 —』南窓社、昭和46年。
- * 西村純一郎訳「アクシオコス — 死について —」(岩波書店刊『プラトン全集』第15巻所収、昭和50年。
- * 長坂公一「アクシオコス解説」(同上所収)、昭和50年。

3) 以下の論及には『アクシオコス』の底本としてスイエの校訂になるビュデ版(1930年)を用い、引用や言及に当たっての頁と行の指摘は、それに付されているステファヌス版の数字とローマ字記号とによった。

4) 本篇対話の設定年代については、368 d 以下に前406年の政治事件がごく最近の出来事として言及され、また364 a には前403年没のカルミデスが生きて登場しているので、両史実の間の前404年頃であると一応は推定できる。したがってソクラテスは65歳、アクシオコスは55歳ぐらいに設定されているようである。464 a や364 d ~ 365 a にアテナイの地理が正確に描写されている点から、作者がアテナイ人あるいはアテナイ的教養を身につけた人物であることは明らかである。しかし、それにしては、話の展開からうかがえる事象には、他の文献から確認される史実と矛盾するアナクロニズムが多く、したがって本篇は、明らかに前5世紀末より遙か後代に書かれた。

具体的にはいつ頃か。執筆年代推定のための最も有効な方法は、語彙・語法面の詳細な検討である。本論の目的ではないし、詳述する紙数の余裕もないが、簡単に整理しておこう。本篇は2370余語から成るが、これらを権威あるリデル・スコット編の『希英大辞典』第9版によって筆者が調査した結果、次の点が特徴として浮かび上がった。

次の各語は、本篇以外では、ポリュビオス(前2世紀)、ポセイドニオス(前2~1世紀)、ピロデモス(前1世紀)、アレクサンドレイアのピ

ロン(前1~後1世紀)、ディオソ・クリュソストモス(後1~2世紀)、プルタルコス(同)、ルキアノス(後2世紀)、ガレノス(同)など、主に前2世紀以後の文献中の用例が指摘されている。

ἀνασφάλειν (364c), κρότησις (365a), δυσασπαστός (365b), περιάμπτειν (365c), ἀνεπιστάσια (同), ἀπηχῆμα (366c), κλαυθυμριζειν (366d), δυσαρέστησις (同), παραρθεῖν (367b), χειρονακτικός (368b), πλωτικός (同), ἀμφίβιος (368c), ἐπίκαισις (同), σφυγματώδης (同), ἀπότευξις (368d), ἀφίκορος (369a), συναρανίζειν (同), ἀντιπαθεῖα (370a), συνυποτίθεσθαι (同), πύρεσθαι (同), σύρμος (370c), περιαθρεῖν (370d), ἐπίμονος (372a)。

要するに、本篇には、おおむね前2世紀以後の文献から用いられ始めた語あるいは頻出するようになった語が、全体からの比率は多くはないにせよ、かなり多数含まれている。このことと、トラシユロスの時代すなわち後1世紀には既に本篇が存在していたということが前提となるディオゲネス・ラエルティオスの証言とを考え合わせるとき、古典学者シュヴァリエの主張を踏襲したスイエの説、すなわち本篇成立を前1世紀とする説は、極めて当を得ていると思われる。ミユラーも、語彙面での彼独自の考察によって同じく前1世紀説を割り出している。さらにショリーは、本篇の文体および内容が主にストア学派のポセイドニオスに由来しているとするマイスターの説を紹介しているが、ポセイドニオスは前2~1世紀の人物なので、この説もスイエ説と矛盾するものではない。

5) クレメンスヤストバイオスによる引用文は、現在伝えられている『アクシオコス』諸写本の各当該箇所と比べると、しばしば差異がみられる。この事実は、彼らが引用した写本が、現在私たちが手にしている諸写本とは別系統のものであったことを窺わせる。彼らの引用文の信憑性をどの程度と見積もるか、古典学者たちの見解は異なる。スイエは、彼らの引用文の読みをかなり肯定的に扱っているが、それに比べるとバーネットは否定的である。また、プリנקマンも、ストバイオスの引用文の信憑性を低くみている。